

理学部を去るにあたって

朽津 耕三 (化学教室)

今春でちょうど40年を理学部化学教室で過ごしたことになります。3年ばかり外国に行っていましたので、その時期を除くと、今までの人生の60%以上になります。このすばらしい研究教育の場に身を置くことができたのは、私にとって無上のそして過分の幸運でした。感想はこの一言に尽きます。その間いつも忙しく働いていたような気がします。特に最近の1年はそうでした。よく体を壊さなかったと自分で感心しています。理学部長としては、力不足で皆様にずいぶん有形無形の御迷惑をかけたのではないかと案じています。しかし、有馬前学部長、藤田・宮澤両評議員、野島事務長をはじめ教官職員の皆様の御支援によって、何とか終を全うできそうです。心からお礼申し上げます。

私が化学に引きつけられたきっかけは、色の変化の美しさでした。さまざまな物質が示す変化の手品を見るような面白さが、いつも私の研究の推進力になっていたようです。物理化学を専攻したのも自然のなりゆきで、自分の適性と嗜好に最もよく合っていたような気がします。森野研究室に入ったとき、先生から電子回折をテーマとして与えられましたが、電子回折の誕生もちょうど私と同じ1927年だったのは奇縁でした。その後ずいぶん長いあいだ電子回折とつきあいました。“分

子の形と動きを決めるものは何か”を追求しているうち、“分子振動の非調和性”という問題にぶつかりました。自分がひとつのイメージを作り出したつもりになっていたら、ちょうど同じころチェコとアメリカの研究者がほとんど同じようなアイデアを持っていたことを知りました。水島・森野両先生が主催された1962年の東京国際会議で3人が集まったとき、“われわれは決してanharmonicにならないで、harmoniousに研究交流を進めよう”と誓いあいました。その言葉どおりに仲よく研究が進められたのはよい思い出のひとつです。研究テーマはしだいに“分子の激しい動き”に移って、化学結合が切れたり、電子が飛び出したりするような現象を色々と手がけました。これらの研究は、近藤助教授をはじめとする研究室の皆さんの活躍によるものです。また、ふとした契機で分子研の廣田栄治教授らと気体分子の構造定数表(Landolt-Börnstein Tables)2巻を作り、また単位と記号の標準化に関するIUPAC委員会や日本化学会の仕事にかなりの時日を使いました。研究やこれらの作業を通じて外国にも多数の親友を持たたことは、かけがえのない喜びです。気体分子、とくに励起状態の構造と動力学は、レーザーやコンピューターの発展によって大きく変貌しつつあります。今後が本当に楽しみです。

量子化学と分子構造論などの講義も、無上の楽しみでした。講義を始めてまもなく、幸運にも You and Your Students という本に出会いました。これはMITで教師のために作った小冊子で、講義計画の立て方、黒板の使い方、試験のしかたなどごく当たり前のことばかり書いてあるのですが、この本を読んで耳の痛い思いをしない先生は稀でしょう。私はなるべくそれらの注意を忠実に実行しようと思いました。最近、教育学部で理科教育の講義を担当できたので、教職を志す学生諸君にこの本の内容を紹介しました。このほかに、学生諸君の進路指導に一喜一憂した日々が心に残っています。

ただひとつ、残念でないことがあります。それは、御殿下運動場がこの数年は使えなくなって、草野球ができなかったことです。私の部屋はちょうど運動場を見下ろす位置にあるので、空いているときを見定めるのには好都合でした。また暫くしたら体育館が完成して、運動場も復活するのでしょうか。そのときには、もう一度一塁を守ってみたいと思っています。どうぞ声をかけて下さい。

理学部の皆様、本当に長いあいだ色々とお難うございました。皆様の御活躍と理学部の御発展を切に祈ります。